

宵過ぐるほどすし寝入り給るに

(枕元に大変美しい様子の女が座て)

御枕上にいとをかしげなる女居て

「おのがいとめでたしと見奉るをば

尋ね思ほさで(格別な取り柄もない)かく異なること

なき人を率ておはして時めかし給ふ

(大変にくわずつらい)

こそいとめざましくつらけれ」とて

この御かたはらの人をかき起さむ

とすと見給ふ

めでたし…】

時めかす…】

物に襲はるる心地して驚き

給れば灯も消えにけり。(いやなこと)うたて

思さるれば太刀を引き抜きて

うち置き給ひて右近を起し給ふ

これも恐ろしと思ひたるさまにて

参り寄れり。

物…】

驚く…】

思す…】

「渡殿なる宿直人起」して

紙燭さして参れと言へ。」と

のたまは「いかでかまからむ

暗うて。」と言は「あな若々し。」と

うち笑ひ給ひて 手を叩き給は

山彦の答ふる声いと疎ま(気味が悪い)し。

人え聞きつけで参らぬに、この女君

いみじくわななき感ひて、いかさま(どうして)に

せむと思ひ。汗もしとどになりて

我が(茫然自失し、生気を失つた様子である)の気色なり。「もの怖ぢをなむ

わりなくせさせ給ふ本性にて、いかに

思さるるにか。」と右近も聞ゆ。

いみじ…】

わりなし…】

聞ゆ…】

いかでか…】

】

】

】

まかる…】

】

いとか弱くて 昼も空をのみ見づる

ものをいとほしと思して「我人を

起こさまむ 手叩けば山彦の答ふる

いとうるさし。ニニににしばし

近く。」とて 右近を引き寄せ給ひて

西の妻戸に出でて 戸を押し開け

給れば 渡殿の灯も消えにけり。

いとうほう。【
】

うるさし。【
】

風すしうち吹きたるに 人は

すくなくて 候あふかぎり皆寝たり。
(お仕えする人は)

この院の預かりの子 睦なましく使つかひ。
(親しく召し使つておられる)

給たまふ若き男 また上童一人

例の隨身ばかりぞありける 召せば

御答して起きたれば「紙燭さして

参れ 隨身も弦打ちして絶えず

(警戒の声をたてよと命令せよ)
声こゑづくれと仰おほせよ。

候あふ。

召ます。

人離れたる所に心とけて寝ぬる

(油断して寝るとは何事だ)

ものか。惟光朝臣の来たりつらむ

は」と問はせ給ば「候ひつれど

仰せ言(し)命令もなし、暁に御迎に参るへき

由申してなむ、まかで侍りぬる」と

聞こゆ。

★確述用法

このかう申す者は、滝口なりければ

(その場にふさわしく)

弓弦いとつきづきしくうち鳴らして

「火危ふし。」と言ふ言ふ、預かりが

曹司の方に去ぬなり。内裏を思しやりて

名対面は過ぎぬらむ、滝口の

宿直奏し今こそと推しはかり給ふ

は、(まだ、あまり更けていないのであろう)まだいたう更けぬにこそは

内裏【 】

思しやる…【 】